
エンゼルランプ

佐井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンゼルランプ

【Ζコード】

Ζ7551F

【作者名】

佐井

【あらすじ】

想い人を待ち続ける少女、少女の幸せを願う少年、幼い兄妹の物語
「もう一度会いたいの。それだけだよ」「そばにいてやること
は出来ないけど、幸せになつて欲しいんだ。」「今度はオレがあん
たを助けるばんだ」「あーあ、早く大人になりたいなあ」

これはまだ夜が明けたばかりの時だった。ここ卯月山ウツキヤマにも東の方から明るい太陽の光が差し込み、肌寒い空気の中に何となく温かさを感じさせてくれた。そんな中、木々の合間に縫うように流れる細い川のほとりを、年はまだ幼い少年と少女が川の流れに逆らつよつて緩やかな坂道を登っていた。

卯月山はそれほど高い高さも無く、道も綺麗なのである程度の準備さえしておけば誰でも超えていけるような山だった。おまけに環境が良いらしく、この山ではいろんな種類の植物が育つので、多くの旅人や商人達が頻繁に卯月山を越えていくのだ。

「お兄ちゃん、もう疲れたー」

「もう少ししたら休憩するから頑張れ」

少し先を歩く悠吏ユウリは足を止めて妹の茉吏マツリが自分に追いついてくるの待つ。まだ幼く身体も小さいマツリにとつてはさすがにこきなりの山越えは厳しいのかもしれない。

ユウリはマツリがトボトボと頼りない足を動かすのに見かね、持っていた荷物を一旦降ろすとマツリに背中を向けるよつこしてしまった。

「ほり背中乗れよ、そん変わり荷物持つてて
「…それは良い。兄ちゃんが疲れるでしょ」

「オマエにトロトロ歩かれるよつは全然マシ」

「……ゴメンナサイ」

「嘘だよバーカ。ほら、さつさと乗りな」

そりやつてコウリがからかうように笑うと、マツリは「クンと小さく頷いて兄の背中に乗つた。そしてしつかり背中に乗つた妹に荷物を握らせて、兄は力強く歩き出したのだつた。

ユウリとしては出来れば1日のうちに山を越えてしまいたいと思っていた。そうでなければ野宿になってしまふからだ。

自分だけなら良いのだけど、出来れば妹にはそんなことをさせたくなかつた。だからまだ夜が明ける前から出発してここまで来たのだつた。

しかし、いくら華奢な女の子とはいえ1人の人間と荷物を背負つての山道となればさすがのコウリにもかなりキツイ。あれから數十分を1人で歩き続けると息も切れ切れになり体力的にも落ちてきる。そもそも休憩しようかと、足を止めそつと視線を背中の方に向ければマツリはいつの間にかスヤスヤと眠りについていた。そのあどけない寝顔に何故かホッとして、顔の力が抜けるのを感じた。

「（もう少しだけ、先に行つてから休もう）」

マツリを起こさないようソッとその身体を背負い直して、再び歩みをはじめた

…と、そのと。」

「ウリはある事に気が付いた。

「…なんだアレ」

視界の端に映つたのは、変わり栄えのしない木々達の隙間をもぐもぐと立かしめる白い煙。視線をそのままトトに降ろしていくと、そこには見えたのは…「ひやら家のようだつた。

「…」「一ちゃん、」

「マツ、ちよつと起きて」

「んー…、どーかしたのあ」

「家がある。誰か住んでんのかも」

ユウリ背中で寝ぼけたようにモゾモゾと身動きする妹の意識がはつきつと覚醒してくれるのを待つてやる。

するとマツリは自分でスルスルとユウリの背中から滑り降つていつた。背中が軽くなつたユウリはマツリから荷物を受け取る。

「どうするの?」

「…んー…」

「ねえお兄ちゃん、行つてみない?」

「もし変な奴だつたらどーすんだよ」

「良い人だつたら休ませてくれるかもしれないじゃない」

「けどこんな山奥に住んでるなんて変だり」

「…変な人だつたら、逃げる」

「……今度は背負つてやんねーからな
「がんばる」

「よし」

キュッとコウリの旅衣^{タケハコロサ}を掴んだマツリの小さな手をコウリが握り直す。比較的歩きやすい川沿いの道を逸れて、草や木の生い茂る中に身を隠しながら少しづつ煙のみえる方向へ向かつて行つた。

近付いて行くについれて家全体の様子が見えるようになつてきた。よつやく木々が開けた所まで出でると、そこにあつたのは薄汚れていはいるが白い石壁で出来た小さな家だつた。さつきの煙はその家の屋根に繋がる煙突から上がつてゐる。木製の板がはめ込まれたような簡素な窓が一つあるだけで入り口は見えない。おそらく此方は家の裏側のようだ。見た感じは普通の、普通の家だつた。

「ねえ、お兄ちゃん…」

「…なんだよ」

「あれ、見て」

建物の方にばかり視線を向けていたユウリはくいくいと繋いだ手を引かれ、マツリの指差す先に視線を移してみた。家の裏でから舗装された道のような物が続き、その道の向かう先には木の柵で囲われた広い畠のようなものが広がつていて。確かに個人の畠を所有している家は町の方でもいくつもあつたけど、こんなに広くてしかも綺麗に手入れされた畠は今までに見た事がなかつた。

一体、どんな人が住んでるのだろう…

⋮ その時、だ

『わんわんわんわん
』

「！」

果然と畠の方に意識を取られていた2人は、突然背後から聞こえた犬の鳴き声にビックリして草の茂みから飛び出した。そして同じようく飛び出してきたのは、ふさふさとした綺麗な金色の毛に覆われた随分と大きな犬だった。首には何か布のような物が巻かれている。もしかしてこの家の人に飼われている犬かもしれない。

「マジー早く逃げ…」

۱۱۱

1

このままでは人が来る、そう考えたユウリがマツリの腕を引こうとしたその時。家の方から別の人声が響いてきたのだ。

しかし、そこでユウリは違和感を覚えた。聞こえて来たその声は若い女の人の声だったのだ。訳の解らないユウリとマツリは未だ吼え続ける大きな犬を前にして逃げるどころかオロオロすることしか出来なかつた。

「一ら、葵」^{アオイ}

「
あ

「お姉さんには見えちゃダメっていつも黙ってたねでしょー」

…そこに現れたのは、思ったよりも若い女の子だった。淡い栗色の長い髪を右側で緩く一つに結んでいて、マツリよりも…おそらくコウリよりも幾つかは年上のようだがまだ大人とも言えないぐらいな年頃の少女。やはりあの犬の飼い主らしい。

「『めんねービックリさせて』

「え…あ、いや」

「随分若い旅人さんだね。2人で来たのー？」

「や、旅人…って訳じゃ」

「あら? そりなんだ」

戸惑いながら受け答えするコウリを余所に、少女は犬をなだめながらまるで近所の知り合いとでも話すような軽い口ぶりだった。

「葵、もう少しで『飯だからあつち行つててねー。良い子だから』

大人しくなつた犬（葵といつらしげ）によしよしと撫でながら話しかけると、葵はまるで返事をするかのように一聲鳴いて。そして再び茂みの中へもぐつて行つた。

少女はその姿を満足げに見送ると視線を戻しコウリとマツリを見比べる。

「『飯、食べた?』

「へ…?」

「朝『飯、もう食べちゃつた?』

「……いや」

「ちょうど良かった! 私も今からだから一緒に食べよつよ

「…良いの？」

「もちろんだよー」

不安げに問いかけたマツリに少女は緩く笑いかけ、優しくマツリの髪を撫でた。

するといとも簡単に警戒を解いたマツリはパアッと明るい表情を浮かべて隣りにいるコウリの顔を見上げる。

「良い人で良かつたね、お兄ちゃん！」

「あ、やっぱり兄妹なんだ！似てる！」

「わたし茉更つていうの。お姉ちゃんは？」

「お姉ちゃんは椿希^{ツバキ}つて言います。よろしくねー」

ツバキちゃんツバキちゃん！とはしゃぐマツリはすっかり懐いてしまった様子だ。そんなマツリに対してもく口を出すことが出来なくなってしまったコウリは、困ったような表情を浮かべて妹の頭を撫でるその人物にジッと視線を送る。

するとその視線に気付いたツバキは苦笑いを浮かべた

「そんな顔しないでよ、変な人じゃないから」

「…………」

「お兄さんも良かつたら名前教えてくれないかな

「…悠吏」

戸惑いながらも、ヒトコトだけそう名前を告げたコウリに、ツバキはまた嬉しそうに笑つたのだった。

*

囲炉裏を挟んで向き合つようにして座つた小さな客人達は、ありありの食材で簡単につくれられた質素な食事を、かけ込むように凄い勢いで口に運んでいた。

「（相当お腹減つてたのかな…）」

旅人では無いと本人達が否定していたので違つらしく、だとしたらこの兄妹2人だけでのこのたびにはきっとそれ以上に何か深い事情があるのだろう。

ツバキは自分の食事も進めながらじつくりと2人を観察する。

若干赤色混じりな茶色の長い髪を頭のてっぺんでお団子にしている妹、マツリ。ちなみにさきほど年を聞いとこり『10歳くらい！』と元気よく曖昧な返事を返されてしまった。見た目からしてもまだ幼く、ちょうどそれぐらいの年齢ということで間違つてはいないだろ。

対する兄、コウリは妹と同じ綺麗な赤茶色の髪を持ち風になびくほど長さはある短髪だった。顔立ちはまだ子供らしさは抜け切れない。

いながらもなかなかに整った顔立ちをしていた。しかし妹と2人並んだこの様子を見ればやはりまだ子供らしかった。ちなみにこちら兄貴の年齢はといえば『たぶん16ぐらい』とやはり曖昧な回答だった。

「ツバキちゃんこれ美味しいね」
「ほんと? オカワリもあるよー」
「えつ、良いの?」
「もちろんー」

「マジ、オレのやるから辞めな

マウリは御椀を差し出しながらマジコの腕を遮った。

「あれ、もしかしてお腹減つてなかつた? それとも口に呑わなかつたとか…」
「そんなんじゃない、けど」
「だったら良いよ。多めに作ったから遠慮しないで」

マウリは何も言わなかつたけどまだ何かを聞いたそうな表情に見え

いた。元気になつて、と笑顔を浮かべながら再び彼女の方に手を差し出せば、マジコは兄の様子を気にしながらもゆっくり御椀を差し出した。

た。

しかしツバキは囲炉裏の真ん中で火にあぶられグツグツと煮える鍋から、祖母に教わった特製の山菜鍋を一掬い分ほど御椀によそつてマツリに手渡す。

「すると、今度は受け取ったマツリまでもが何か浮かない顔をしていたので驚いた

「ゴメンナサイ…」

「え、っと…どうかした?」

「わたし達、あまり持つていのいの」

「持つてない…って、何の話?」

「……おかね」

お金。

申し訳なさそうにそう呟いたマツリに、ツバキはチラと隣りの兄に視線を移してみれば同じような表情を浮かべていたので、おそらく彼も同じことを心配をしていたのだろう。

「…どうやらまだツバキは2人から信用を得られたわけでは無かつたらしく…」

「お金なんて取るつもないよ

「え」

「当たり前でしょー！私がいきなり誘つたんだから」

まだ戸惑つた様子の2人にツバキは苦笑いを浮かべた。

「わたし、小さい頃からお婆ちゃんとここに住んでたんだ。それでお婆ちゃんが昔からよく山を越えてくる旅人さんにこうやってタダでご飯食べさせてあげたり布団貸してあげたりしてたの。お婆ちゃんは2年前に死んじゃつたけどね」

「それじゃ…アンタ今1人なの」

「そうだよー。けど最近訪ねて来てくれる旅人さんがすこく増えたからね。月に一回顔を見せに来てくれる人だつているくらいだし。今はその人達に畠で採れた野菜とか薬草とか買つてもらつて生活してるーつてわけ。」

だがそれでも寂しくないと言えば嘘になる。それにここへ遊びに来てくれる人達はみんなお婆ちゃんの知り合いだつたり旅商人さんだつたりするため、マツリやユウリのような年頃の近い子供と接する機会は全く無かつたのだ。

だから2人の姿を見つけた時、自分を訪ねて来たわけでは無いにしろ何故だか放つておけずに声をかけてしまったのだ。

「だからさ。余計なお節介に巻き込まれたとでも思つて、ご飯食べてつてよ」

「だからさ。今度は促すよつてユウリの手にある中身の少なくなつた御椀に向かつて手を差し出した。

ユウリはツバキの顔と手を見比べるようにして少し考える仕草をした後、一気に御椀の中身を口の中にかけ込んで空にしてから照れくさそうにしながらもそれをツバキの手に押し付けたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7551f/>

エンゼルランプ

2011年1月4日03時56分発行